

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)

県政の課題(テーマ)報告書

令和2年10月10日

山梨県知事 殿

氏名 宮崎のぞみ  
留学先 ニュージーランド  
留学期間 令和元年 12月 16日 ~  
令和2年 8月 20日

1 研究の課題(テーマ)

子どもを産み、育てたいまちへ

2 概要

与えられた県政の課題(テーマ)の解決に導く考え方及び対応策等

1. はじめに

子育て世代が住まいを探す時、何を重要視するか。大きなポイントとして街並みや環境整備、利便性や保育・教育・医療施設やサービスの有無が挙げられる。「子育てのしやすい国」とも称されるニュージーランドでの生活、またボランティア活動を通して学んだ事例をまとめる。

2. ニュージーランド的保育をみる

(1) 保育サービスの充実

1. 緑、公園

豊かな自然の国ニュージーランドでは、街中でもその片鱗を感じることができる。道端には草木が植えられ、住宅街を少し離れると丘や林などが多くある。街には美しい川が流れ、その景観は人々の心を潤す。公園の数も特徴的で、街のシンボルとして存在する大きな公園(ハグレーパーク等)の他に、地域の公園の数もとても多い。休みの日は公園で遊んで過ごすというのが子育て家庭の一般的なもので、特に休日はどの公園をみても、たくさんの人で賑わっている。家から歩いて行くことができる範囲に公園があるというのも、行きやすさに寄与しているだろう。

2. サービス、イベント

私の住んでいたクライストチャーチでは、街全体としてのイベントが多く開催されていた。ほとんどのものは、公園内やその付近で行われる。コロナが起こる前までは、毎週末なんらかのイベントが催され、街中は人で賑わっていた。具体的な例としてサーカスやミュージックフェスティバル、ヌードルマーケットなど、家族が揃って行くことのできるようなものが挙げられる。大体のものは無料で開催されるため、参加もしやすく、休日に子どもを連れて外へ出かける良いきっかけにもなる。また、地域ごとに設置されている図書館でも、子ども向けイベント(絵本の読み聞かせ等)は多く開催されている。

## (2) 実際の保育現場

### 1. 子どもの様子

ニュージーランドでは「自由保育」に重きが置かれ、子ども達は保育時間の大半を自分の意志と判断によって遊びを選択し、時間を過ごす。そのことは子どもの自由で独創的な遊びの世界を創りあげることに関がっている。子ども達は自分の興味の赴くままに遊びを進める。いつ何をしてもいいし、反対にいつ何をやめてもいいのである。「個を尊重する」ニュージーランドならではの保育理念が現場で実現されている。

私がボランティアや見学をさせていただいた園では、「遊びの用途がはっきりしていないもの」が設置されていることがよくあった。それは例えば、木の板やブランケット、紐や石、アーチ状の階段などであった。それだけでは一見「遊びの道具」とは見て取れないようなものを子ども達は一層好む。彼らは見事なまでに、そのような素材を組み合わせ、自分たちだけの独創性あふれる、他には同じものが何一つとしてない世界を創りあげてしまう。同じ素材を使っても、ある日には宝物を運ぶ海賊船、ある日にはあるものを他のものに変えることができるロボット、またある日にはどこかへ続く難解な道へと変貌を遂げる。「自由遊び」がもたらす問題や、実施する上での難しさは多くある。しかし「遊び」において子ども達がプロフェッショナルだということを、彼らは証明している。



### 2. 保育者の様子

保育者は遊びを導くリーダーではなく、子どもの「遊びこむ力」を信頼し、必要な時に必要な手助けをする者としてその場に存在する。保育者は子どもの遊びを邪魔することなく、「観察」と「傾聴」に集中する。子ども達がどのような遊びを見出し、深め、また発展させていっているかを注意深く‘みて’いる。そして子どもが遊びの世界をより深められる手助けを提示する（ポジティブガイド）。

子どもの遊びの世界に直接入り込み、導くことをあまりしない保育現場だからこそ、環境整備における思いと準備はとりわけ強い。保育者は子ども達の気づきのきっかけを、遊びの環境に散りばめる。例えば、Ara Early Learning Centreで保育室の机の上に置かれるものは日々違っていた。細かく切られた5色ほどの折り紙とそれを貼りつけることのできる白い紙、そしてのり。保育者は子どもたちが白い紙

の上に折り紙を貼ってなにかを製作する姿を思い浮かべて遊びを準備する。しかし実際に見られた子どもの姿の多くは、細かい折り紙をパラパラと触る感触であったり、撒いては集めてみたり、違う机に置かれていた粘土と混ぜてみたりと、保育者が予想していた姿とは決して一致するものばかりではなかった。しかしこの子ども達の姿はどれも「正解」である。なぜなら保育者は子どもに対して「遊び方」は教えていない。子ども達一人ひとりが何をどのように使って遊ぶか、そのプロセスに意義があると保育者達は考えている。そこからなにを感じ、どこに楽しさを感じるのか。一人ひとり見出すものが違うことに保育者は喜び、「成長」だと捉える。

### 3. 保護者の様子

保育園・幼稚園のほかに、プレイグループ（保護者主体の保育活動団体）等を利用する保護者が非常に多い。ここでは親と子どもが一緒に参加して活動を行うため、同じ世代の子どもを持つ親同士のコミュニティの広がりにも繋がっている。どの保育施設でも、国の教育省が定めた統一のカリキュラム「テファリキ」に基づいて教育されているのであれば、支援制度（下記参照）が適応される。そのため保護者は、一週間のうちにどの保育施設を利用するのも自由に選択することができる。また、家庭での保育を大切にしている家族が多く、保育施設に子どもを預けるのは、週に3回4時間程度というようなケースも多くあるようだ。

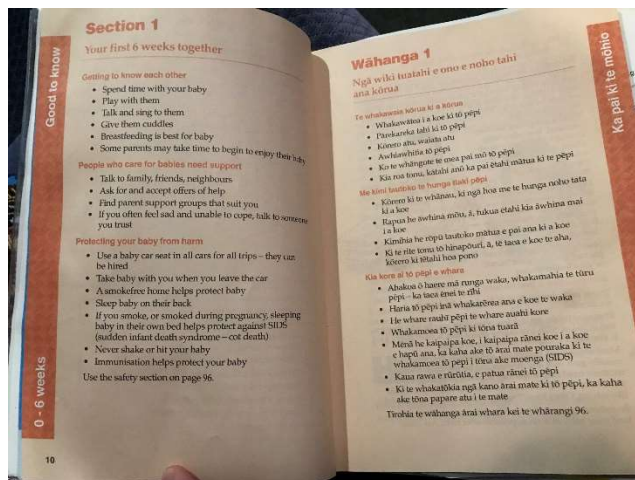
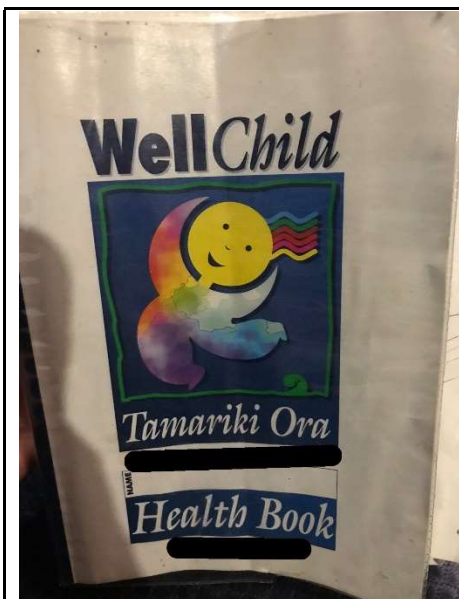
### 3. 政府による工夫

支援制度とは2007年にニュージーランド政府が導入した、週最大20時間（1日最大6時間）までは保育料が無料になるという制度である。親の収入や社会的地位、人種、家族の状況、そのほか一切のことを考慮せず、この制度が活用できる。

出産・育児・健康サポートも充実しており、妊娠中から子どもが生まれた後まで、継続して支援を受けることができる。妊娠すると担当助産師が決まり、妊娠中の健診やサポートを行う。出産数週間後は担当助産師がサポートを行い、その後は子育て支援団体（プランケット）に引き継がれる。その後プランケットが定期検診や予防接種などを行い、24時間の子育て相談にも対応している。

また子どもと過ごす時間を十分に取れるというのは、ニュージーランドの「働き方」にも起因する。ニュージーランドでは、残業をしないことや有給休暇の多さでも有名であるほか（各会社にもよるが、正社員で1年間勤務した場合、20日（4週間）の有給休暇を連続でとることもできる）、家族の事情や体調不良でも休みを取りやすい育児環境といえる。

さらに教育現場においては、ニュージーランドでは幼児教育から高校までのすべての教員を「ニュージーランド教員委員会（NZTC）」で管理しており、正式な登録教員となるには経験を積まなくてはならない。登録後も3年に1回は許可証を更新しなければならず、性格や教員としての向き・不向き、教職のブランク期間、ほかの教員からの評価、プロフェッショナルとしての能力開発プログラムの受講などが考慮されるため、常に教員の質がキープされている。



#### 4. おわりに

ニュージーランドでは子どもの個性を重んじた保育内容が現場で実践されており、その水準が高いことや保育に協力的な保護者が多いことがより理解できた。社会全体が「子育て」に対して受容的であること、それは「ニュージーランド」の特色であり、そのことが「子育てのしやすい国」と呼ばれる所以といえる。

そのような姿勢が生み出される背景には、子どもと過ごす時間を充分に取れることができる働き方や、子どもを連れていくことのできる場所やサービスが充実していることなども挙げられるだろう。「誰かと一緒に子育てをしている」、そう思える環境づくりが充分になされていると感じた。

#### 参考・引用文献

- 国土交通省、「子育てに適した居住環境に関する研究」、2010年5月  
<https://www.mlit.go.jp/pri/houkoku/gaiyou/pdf/kkk92.pdf>
- 自治体国際化フォーラム、「特集 各国の子育て支援に関する取り組み」、2015年2月  
[http://www.jlhc.org.au/wp-content/uploads/2014/08/04\\_sp-1\\_merged.pdf](http://www.jlhc.org.au/wp-content/uploads/2014/08/04_sp-1_merged.pdf)

### 3 添付書類

詳細について、図・表・写真などの資料も含めてA4縦版5枚以内にまとめて報告してください。  
 ※パソコン・ワープロの使用可（使用する文字は12ポイントとしてください。）